



赤羽別院報 第14号

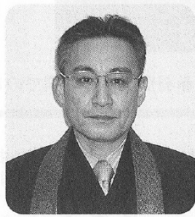
発行所：真宗大谷派  
赤羽別院 親宣寺  
発行人：出雲路 善公  
愛知県幡豆郡一色町  
赤羽上郷中14  
Tel.Fax (0563)72-2308  
印刷：鶴エムアイシーグループ

この度、野々山前輪番の後を受けて、当別院の輪番事務取扱を命ぜられました。今、赤羽別院が再生を模索する大事な時に、一方では、別院

の存在が厳しく問われております。岡崎教区では、「二十一世紀プラン」に基づき、別院を教化の拠点とする

『教化センター』構想実現のため、教区における教化事業を各別院崇敬区域に委譲していく体制を思考しております。

教団においては、別院を『普通寺院』に対して『特別寺院』略して別院と規定し、五十二の別院があります。そのうち寺号を持つ別院は、十五別院であり



## 別院の再生を願って

赤羽別院輪番 (事務取扱) 出雲路 善公

ます。赤羽別院もその一つです。各別院ともにその成り立ちは様々ですが、ご門首が住職であります。

その元を訪ねてみると、別院の前身は「御坊」と称され、現在でも別院というよりも「御坊」の方がご門徒方に親しまれている別院もあります。そもそも「坊」の語源はといえますと、「古の奈良平安両京に於ける行政上の区画の一方四十文を町とし、町四を保とし、保四を坊とし、

坊四を条とす」とあるように元来、「坊」は都市区画の用語だったようです。後に、転じて寺院の別称として「坊」と称されるようになりました。我が派では、中興の祖蓮如上人が京都大谷の地を退いて、吉崎、山科、石山等の地に止宿し、祖像を安置礼拝する頃から、これらの寺院に対して「御坊」と呼ぶ風習となり、現在のように本山の別院と

称するようになったようです。しかし、ただ単に由緒があるがゆえに「御坊」と親しまれていたわけではないと思います。そこには、御本山の分院として御門徒や寺院が、本寺本山に思いを馳せ、崇敬護持してきた歴史があります。赤羽別院も決して例外ではなかつたはずで

しかしながら、時を経るに従って、特に教団の組織改編により、別院の役割が大きく変貌し、その機能について十分な検討もされることなく現在まで到り、中には別院無用論まで囁かれる状況となっております。

しかし、果たして別院の存在価値はなくなつたのでしょうか？そしてその機能は失われたといえるのでしょうか？「坊」が都市区画の用語であつたといふことからすれば、その原点に戻り、「組」の枠組みを越えた存在として、「組」の枠では成しえないことが行える存在として見直し、活用すべきではないのかと考えます。

宗門は、二〇一一年には親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えます。別院としてもその機能を回復し、来るべき時には、住職でありますご門首をお迎えして赤羽別院親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を勤めることを願っております。皆様方のご協力とご尽力を伏してお願ひする次第であります。

仏教という言葉は普通に使われるようになってせいぜい百年です。それ以前は仏教という言葉よりも仏法というたもんです。



## 「念仏申す ということ」

吉良町 正覚寺前住職  
櫻部 建師

昨年11月15日(水)、赤羽別院の報恩講でのご法話を抜粋して掲載いたしました。

仏さまの教えは仏法と申したの  
です。

我が心が「法」すなわち真の  
道理に目覚めて、静かで、安ら  
かで、つまらないことにこだわ  
らないという自由の心になるこ  
とが、仏さまの教えの目指すこ  
所で、仏さまの教えは、信仰  
と言うよりも、心の修行であり  
ます。お念仏の教えもやっぱり  
修行です。念仏行者とか、信心  
の行人などと「行」という言葉  
がよく使われていますよ。

教えがあつて、その教えに従  
って行いをする、これが「行」  
です。そしてその修行の結果、  
安らかな、静かな心になれる、  
それが「証」ですわな。その修  
行のところへ、「信」というも  
のを親鸞聖人だけがお加えにな  
られて、教、行、証から教、行  
信、証となつた。

わたしらの念仏の教えは、修  
行といつても実はただ修行じや  
ない、行信であるよ。・・・その  
ように考えたらよい。聖人の御  
和讃のなかに

他力の信心うる人を  
うやまいおおきによるこべほ  
すなわちわが親友ぞと  
教主世尊はほめたもう

とあります。敬い大きに慶ぶと  
いう言葉が信ということですよ。  
敬い慶ぶということがなければ、  
信心でも信仰でもないのです。  
仏さんいつも見ていらつしやる  
いつも見守って下さつとる。尊  
いな、ありがたいな、というの  
が真実信心ということですよな。  
お念仏が行です。南無阿弥陀  
仏と口に称えることが行です。  
それ無しには、いくら頭をひね  
つても、いくらお説教を聞いて  
も、いくら本を読んでも、決して  
敬い慶ぶころにならん。

仏さんは真の道理をお説きに  
なつた、そういつたらいいと思  
います。真の道理が人間の世界  
へはたらきかけ呼びかける姿が  
仏さまだ、という具合にいただ  
けたらもつといいということだ  
す。行は私たちが真の道理を受  
け止める実践、一足一足の歩み

という意味があります。しかし  
人間の根性というものは、自分  
勝手な根性のほうが強いから、  
呼びかけの音が響いとつても身  
につかんことがある。その法が  
まさしくこの私の身についたと  
き、証となる。誰でも、何処に  
いても、何をやつとつてもお念  
仏は申せるし、申したらいい。  
そういう形で仏法の行、仏法の  
実践を念仏の祖師方が教えて下  
された。不思議に、仏のお名前  
を呼ぶことが積み重なつていく  
ときに、いつかハッと気がつく。  
人それぞれの感じ方だと思つて、  
確かに大きな力がいつも見守つ  
ておいでる、呼びかけておいで  
るだなあとわかるようになる。  
気がつくと、なるほどなと思  
うことになるが、なかなか気が  
つかん。そこで、気がつくため  
の一番よい方法は南無阿弥陀仏  
とお念仏を申すことなんだ。そ  
れによって過去何百万の人が気  
がついたんだ。我々もお念仏に  
よつて気がつかせてもらうこと  
に間違いないと私は思う。

第八組のページ

青壮年の集い・同朋教室②



■宿業因縁

仏教で「宿業因縁」と言うのは、えてして業がわからぬところから間違った考えが起ころ。その間違った考えによって苦しんでいくんだが、間違いだぞとはつきり知らせようとすると、ろに「宿業因縁」をお釈迦さまはお説きになったんだということが出てきます。

「宿業因縁」とは、言ってみれば自分でこういう私になってしまったことをやってきたものだからこうなるのです。こんなえらい目して毎日生きていかならんけど、どういう訳だか災いがきたような気持ちになります。そうじゃなくて、この事実を認めて引き受けていく以外ないんです。

ところが人間というヤツは、都合の良い事は引き受けたいけど悪いことは跳ね除けたいという根性を持っています。そのためにも苦しむんですね。「宿業因縁」がわからんから苦しむんです。

そこで何とかして嫌がらずに素直に引き受けていくことが出来るようにとお釈迦さまが「宿業因縁」をお説きになった理由であると言えるのです。

■自然(じねん)

「宿業因縁」ということは、しごく法則的で自然であります。ただ問題はそういう事実を私の心が嫌がって、当たり前が障り

になってしまいます。

『大無量寿経』の上巻には「自然(じねん)」という言葉が二十回も出てきます。下巻に於いては三十三回出て、合計五十三回も同じ言葉が繰り返されています。それだけお釈迦さまはお説きになりたかったのでしょうか。

■心という字

自分の心は絶対確かかと言えばこれぐらい当てにならないものはない。大体、「心」という字はコロコロ変わるから心という。お皿の上に卵を二つ置いたのが心の字のもので、転がっちゃうと困っちゃうからつかえ棒を刺して【必】と言う。それだけ人間の心というものは変わってしまう。そんなにいい加減なものに我が人生を委ねるなんてことは危険だよ。

こういう時はしかるべき人、すなわちお釈迦さまにたずねるしかないんだね。(中略)私を救おうとするはたらきが人間の姿をとってこの世に出てくれたのがお釈迦さまなんです。親鸞

聖人は阿弥陀さんのはたらきが「釈迦」という姿をとって出てきて、説いて下さったと理解しているのですよ。

お話・戸松 政憲師  
(岡崎市・福万寺前住職)

昨年は同講座ともに戸松先生を迎えお話をいただきました。しかし、秋以降はお体を崩され、回の後半では先生のお話を聞けなくて非常に残念でした。一日も早く全快されることを八組並びに参加者一同心からお念じ申し上げます。

(文責 伊奈恵祐)

第八組 行事紹介

《同朋教室》

《青壮年の集い》

開催日未定

## 第九組のページ

## 「音楽法要への誘い」

みなさんは「音楽法要」というお勤めの仕方をご存じだろうか？恐らくあまり聞き慣れない言葉であろう。ましてや実際にお勤めになった経験のある方が何人おられようか。ほとんどみえないでなからうか。

伝統的に浄土真宗では朝、夕と二回「正信偈」のお勤めを欠かさず行ってきた。特に真宗大谷派では「同朋奉讃式」によるお勤めが最も定着している。実は先に挙げた「音楽法要」とは、まさしくその「同朋奉讃式」そのものなのである。それは東本願寺出版部発行「真宗大谷派動行集」(通称「赤本」)にも集録されているので明らかである。

話は飛ぶが、アメリカ合衆国ではキリスト教、殊に「カトリック」の信者が多いとされている。映画等でご存じの方も多いと思うが、「カトリック」では「日曜礼拝」が盛んであり、そ

こで必ず「讚美歌」が歌われている。それがより発展し、市民に定着した形がいわゆる「ゴスペル」と呼ばれる音楽であり、その独特のリズム感から日本でも数多くのファンがいる。

話を戻そう。我が第九組では毎年行われる「夏期講習会」において、講習会の前にいつも動行を行うのであるが、その時は「音楽法要」でお勤めをするこゝとなつてゐる。そのために寺族をはじめ、門徒の方へも呼びかけをし、練習会を開催したこともあつた。みなさんに「音楽法要」と触れあつていただくには、このような機会を設ける必要がある。第九組の寺院の中には、独自に「音楽法要」に取り組んでいる寺院もあるので最後に紹介しよう。

吉良町駿馬にある良興寺では、先頃行われた報恩講において「音楽法要」が行われた。音楽法要に積極的に取り組んでおられる「ゴール・アーバー」の長田明子先生を中心に、若院をはじめ老若男女を問わず、志のある方が毎週日曜日の夜に良興寺

に足を運び、練習を重ね、ついに本番を迎えたとのことである。曲目は「衆会」「真宗宗歌」「みほとけは」等定番のものから、「アンパンマンマーチ」「世界に一つだけの花」等ユニークな選曲もあり、また電子ピアノ、フルートの生演奏付きで約一時間の内容濃いものとなつた。

最初は緊張されていたものの、参加者はそれぞれ大きな声で楽しそうに歌つてみえ、特に小学生のお子さん、男性が目立っていたのが印象的であつた。

世の中は若者を中心に宗教離れが加速している。若者達に宗教へと振り向いてもらうには、正しく「今」が正念場である。

真宗の教えとして「時機相應の法」つまり「その時々によさわしい法のあり方、入り口」ということがあるが、今はどのような時機であるのかを正確に捉え、またどのようなことでもきっかけを掴んで入ってきていただけるような、そんな「聞(門)」が求められていると感じる今日この頃である。

(文責 大溪昌寛)



## 第九組行事紹介

## 《門徒研修旅行》

日程 五月中旬

行き先 福井・金沢方面

## 《夏期講習会》

日時 八月二十四・二十五日

会所 吉良町駿馬(またらめ)

良興寺

講師 二十四日(金)

金子みずす記念館館長

矢崎 節夫 師

二十五日(土)

広島大学名誉教授

松田 正典 師

## 第十組のページ

## 本山瓦ものがたり

— 明治時代の偉業 —

## 志貴野製瓦場の開場

(その四)

二〇一一年宗祖親鸞聖人の七五〇回御遺忌法要に向けて御影堂屋根葺き替え工事が着々と進められている。昨年十二月六日には「真宗本願両堂等御修復瓦葺き始め式」の式典が行われ、ご門首の手によって新調の平瓦が葺せられた。

また、明治の人々の御懇念を相続するため、新調瓦の原料には明治瓦をシャモット(細分化)にしたものを再利用し、損傷の少ない約五万枚の瓦が、再び焼きなおして使われることになっている。

## ■示談所設置

明治十三年十一月二十六日、本山配紙の中に再建事業におけるすべての事務を本山が統括し、

その他に事務局の所管として木場場や示談所を設置していた。志貴野においても七軒半に七軒の示談所一棟が設置され、多くの職人やご門徒は仕事に従事する傍らそこで熱心に仏法を聴聞していた。

## ■褒賞された人々

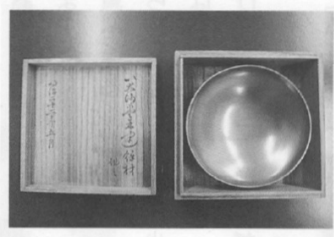
開導新聞によると製瓦場が開場して一ヶ月を過ぎた明治十四年九月十六日、「幡豆郡熊味村法円寺住職石川薩盛(中略)両堂御再建所用の瓦製造に付格別尽力せられしとて法円寺住職へは木盃一個・(中略)再建局より賞与なりたり」との記録がある。これは薩盛師が示談所に詰めてご法話をされた事や、薩盛師の口添えにより、門徒の畔柳氏が工作場開設のために土地の提供をしてくださったことなどへの褒賞と考えられる。

そして、それから約一ヶ月後の十月二十日、東本願寺の法嗣様が製瓦場を御親臨なさった折に西尾市唯法寺住職占部公順師、善福寺住職山背良因師の両名に

木盃一個ずつが贈られている。両名が地域のご門徒から浄財を募り、出納方面において大変ご苦勞をなされたことへの褒賞であった。

## ■木盃について

写真の木盃は、石川師、占部師、山背師に贈られたものと同じものである。



木地は、外側が朱の漆塗仕立てに黒漆で抱牡丹紋が描かれており、内側は金箔が押されている。桐箱の蓋裏側には「大師堂再建の余材を以って之を作る・・・明治二十二年五月」の添え書きがある。

## ■製瓦場を支えた人々

志貴野に近い小島町の安楽寺住職伊奈祐諦さんの祖母が、毎日のように製瓦場で土練りという瓦の原料を練りこむ仕事などを手伝われたことについて、聞かせていただいた。

地元に伝えられているお話から、褒賞を受けた人々の仕事は大変なご苦勞があったに違いないが、それを支えられた多くのご門徒のお取り持ちがあったからこそ、約六年間という短い期間に両堂の瓦あわせて二十八万七千九百二十九枚を焼き上げることができたのである。

先達の偉業をおして、平成の大修復の時期に、私たちは何をはじめめるべきなのだろうか。

(文責 三村謙忍)

## 花々が爺さん

浄林寺住職 新田智則

今も昔も側にいる。お爺さんは枯れ木に灰を撒いて花を咲かせ、お殿様からたくさんのご褒美をもらい、欲張りお爺さんは枯れ木に灰を撒いて、お殿様に灰を撒いたと捕まった

他人が得をしていると我も我もと真似をする。見よう見まねでも真似をする

ご褒美にはかり目が回いて、周りをしっかり見ることもない、得られるものにも多いだの少ないだのと文句を言い、自分が気に入らないからとまた文句を言い、何よりも多く出るのは不平不満の愚痴ばかり

そんな愚痴の灰を辺りかまわず撒いてはいまいか? そんな灰を撒けば同じように愚痴の灰が撒き返される気がつけば自分も愚痴という名の灰まみれになっている

阿弥陀如来の撒くものは同じ灰でも救いの声、お念仏の声となり「私たちを救いたい」との願いの声である

そんな願いが枯れ木の私たちにも信心の花を咲かせて見せてくれまいか、咲いてはくれまいかと阿弥陀如来の願う声

そんな願いの念仏の声にも応えずに、欲張り爺さんが灰を撒く、愚痴と云う名の灰を撒く、今も昔も側にいる



第十二組のページ

十二組坊守研修会

講題

「今、いのちがあなたを生きている(御遠忌テーマ)」

講師

渡邊尚子師

念仏のハタラク

念仏のおいわれを一遍も聞いた事のない人に、念仏一つで救われると言っても、何のこともさっぱり解りませんよね。

南無阿弥陀仏とは、はかりしれない無量寿といういのちに目覚めて、頭が下がることだと言われます。

「私の物、盗らないで」という心は、相手を敵と見てしまう地獄の世界。盗られちゃいけないから「もつともつと欲しい」というのは餓鬼の世界。「役に立つ者にならなければならぬ」「他人に負けてはいけない」「上にならねばならない」と比較し、その心に縛られているのは畜生の世界。

この三つの世界を行ったり来たりしている。そんな私に「お前はどうかや、何処に立っておるのや」と問われて「あー」と目覚める。南無阿弥陀仏は、まず私を目覚めさせる呼び声なのです。



あなたは、  
あなたに成ればいい

本願他力の教えは、「私としてこの世に生まれてきて本当によかった」という領きであり、この南無阿弥陀仏ということばなのです。

「あなたは、あなたになればいい」といつも私に添うて、願

いがかけられ続けています。そのことに領く時、安んじてこの私を引き受け、南無阿弥陀仏と立ち上がっている。それが本願他力の教えです。

今、いのちが  
あなたを生きている

私達は無意識のうちに、「私はこうでなければならぬ」と自分の下した評価に、他ならぬ自分が縛られているのです。

「あー、こんなものに縛られていたんだ」と自分の心を自分で言い当てるのが出来た時、自分から解放される。そこに、『念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあづけしめたもうなり』(歎異抄第一章)が聞こえてくる。「駄目な人は一人もいないんだよ」「あなたは、あなたでいいんだよ」「そうそう、よく気がついたね」と言っ下さった世界に、南無阿弥陀仏と深く領いた瞬間は、どんな喜びにも勝る喜びですね。

一度、その喜びを味わうと、毎日迷いの世界をウロウロしているのですが、お念仏申す事によつて、「お前は何処に立っているのや」と南無阿弥陀仏からの呼びかけを領ける。南無阿弥陀仏を領くということは、本当に嬉しいことです。

悩みが無くなるということではありません。悩みが深ければ深い程、長ければ長い程、その出口が見えてきた時の喜びは深くて大きいのです。その悩みの受け皿は、「今、いのちがあなたを生きている」といわれた本願他力のハタラクとしてのいのちの世界、だからこの煩惱の身のまま安心して生かして頂けるのです。

第十二組行事紹介

《住職・坊守・門徒会研修会》

日時・会場

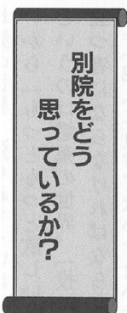
未定

講師

小林光麿師

第十三組のページ

門徒会座談レポート⑤



- A** 別院は、そもそもどういう役割があるのかが、わからなくなっていますよね。
- B** 元々は地域の本山というところがあつたかと思うね。京都まで行けない人たちのために、各地に別院があるんだと思いますよ。
- C** 京都まで行けない人のためというなら、例えばお骨を別院でも預かってくれるのでしょうか？
- D** 預かってくれる別院もあるかと思いますが、願いとしては、やはり親鸞聖人のおられる本山へ足を運んでもらいたいという事があるんじゃないですか。そうでなければわざわざ分骨する必要はないで



- E** しかし、実際には、別院と関わりが持てないんじゃないですかね？
- F** 十三組の門徒会とすれば、別院の報恩講で、毎年みんな出て、お華束作りをしていますよね。(写真)
- G** それならば、一体どういう役割があるんですかね？
- B** やはり地域の教化センターにならないとだめですよ。みんな教えを勉強をしたり、儀式作法を習得したりする場所ではないかね。

- D** よく使い、足を運ぶようになれば、自然に別院にたいする想いが、お寺に対するときと同じように出てくるかもしれないですね。
- E** しかし時代がね。自分がしたいと思っていることは、何でもするのにな、教えを聴くということになる、急にお寺離れを起こしてしまつてね、そのことが問題だと思えますよ。
- F** 会社だったら、五年もしく
- G** それはそうですがね。私自身、今まで別院との関わりがほとんどなかったからね。だから、これからは会合などの会場として、大いに利用していつてもいいかもしれませんね。
- H** だからこそ、情報化社会を、もっと上手く活用していかなくやあいかんですよ。
- I** もうちょっとうまい宣伝方法があると思うんだがね。いつの場合も、情報の発信が弱いんだよね

は十年先を見て、手を打っていますよ。仏教というか、お念仏が生活の中に根付くようになるために、あらゆる手立てを講じる必要があると思うんですがね。御遠忌の予算の二、三割をメディアにつぎ込んだらいいですよ。

**G** このまま放置すれば、どんどん衰退してしまつと心配ですね。色んな人が参加できるように、どんどん情報を発信してほしいですね。特に本山に期待しますよ。

レポートの感想

今回の座談会は十八人でできました。話した内容が、赤羽別院をどう思っているかということでしたが、話をしてみて、別院との関わり合いが、お寺の役にあたって始めて関わるという、ごく一部の人の関わりでしかないと感じました。どうでも、大勢の人がご縁を結べるような別院にしたいかなければと思っていました。(文責 伴 仁志)



## 第十四組のページ

シリーズ親友⑤  
心の元氣塾で出遇った仲間たち

竹内勝宏さん。六年前よりご夫婦で元氣塾に参加される。  
法名 釋 勝智(しようち)

—心の元氣塾にご縁があったとき  
っかけを聞かせてください。

きっかけというのは、六年前ですね。享年十九歳だったんですけれども、息子を交通事故で亡くしまして。しばらく悶々としまして、「なんで家の子がこんなふうになっちゃったんだ」とか、そういうことばっかり考えていましたね。

そういう時期が一年ぐらいあったんですけども、ちょうどその頃、専興寺のご院さんから、「三十代・四十代中心の、真宗について語り合える「心の元氣

塾」という会があるよ」ということで、誘われたのが元氣塾に参加したきっかけなんです。



—いつもご夫婦で参加されていますが、奥さんは元氣塾に参加されて、どのように感じておられますか。

本山に上山したときに、二人で帰敬式を受けたんですけれども。その時にかみさんが言ったことの中で、印象に残っていることがあるんですよ。いわゆる釋○○という、法名をいただいた時に、亡くなった息子は釋弘

誓というんですけれど、「正信偈」にもよく出てきますよね。

—「釋」という「同じ名」をもらったということは、息子と同じ場に立てる、同じところに向ける。そういうものをもらったことが、とてもうれしいですね。そういう気持ちというか、子どもに対しての思いというのは、たぶん僕よりもっと強いと思うんですよね。

—今回、塾長を引き受けられるわけですが、ご自身が元氣塾で学ばれたことはどんなことですか。

そうですね、自分なりにこれからの生き方を考えるきっかけになりましたね。いろいろな講師の方とお話させていただいて、「これはそうだな」と、納得できるということがあるんですけれど。

それは、最初、仏法を聞くと、苦しみとか、悲しみというのは、無くなるんじゃないかと思って

いたんですよ。しかし、やっぱりそれは無くならない、苦しみや悲しみは無くならないと。ただ、それを「仏法に聞く」ことよって、その苦しみや悲しみが、「苦しみをなくなる、悲しみをなくなる」という、それを教えてくれるのが仏法だと聞かせていただいた。

—そういう話を聞いた時に、「あ、なるほどな」と。やっぱり、過去に起こったこととか、事実というのは、絶対消えないものですから、それを忘れるということは出来ないんですよ。だから、忘れることは出来ないけれども、そういう苦しみとか、そういう悲しみでも、「仏法に聞く」ことよって、それが悲しみをなくなったり、苦しみをなくなるといったことが、それが一番、僕にとつての聞法していく理由というか、感じているところです。

(二〇〇七・一・二十三)

聞き取り 中根壯治

編集 安藤智彦

### 【門徒のたしなみ】

#### 報恩講 (お取越し、お引上げ)

一年を通じて門徒の家庭で行う仏教行事は数多くあります。お正月のお勤めである修正会 (しゅしょうえ)、春秋のお彼岸には彼岸会 (ひがんえ)、真夏には盂蘭盆会 (うらぼんえ) として報恩講 (ほうおんこう) があります。そのほか年忌法要、祥月法要、常齋法要 (月命日) もあります。また地域で回り番によるお講も行われています。いずれもお内仏を中心に、家族がそろってお参りする大切な仏事です。

中でも真宗門徒にとつとて重要なのが報恩講であります。まずは各家でお勤めし、寺に集まってお勤めします。地域で集まってもお勤めし、別院でお勤めし、そして本山本願寺に足を運んでまたお勤めします。

人間として生きていくうえで、一番大事な仏さまの御恩に感謝し、そして師・よき人への恩に

感謝することを旨とする仏事ですから、仏事の根本と言ってもよいでしょう。

親鸞聖人は

如來大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし  
師主知識の恩徳も

骨をくだきても謝すべし

と感動的に表現されました。

そこで、あらためてお内仏の報恩講のお荘厳とお勤めを説明します。

① 先ず、住職と相談してお勤めする日時を決めます。



② お内仏の仏具のオミガキをし、お掃除をします。

③ 打敷をかけます。刺繍のものがあればそれを用います。

- ④ お仏華は両花で、木の真 (松ならばなお結構) に、季節の花を添えます。
- ⑤ お華束はお餅か、それに代わるものをお供えします。
- ⑥ 赤いローソクを二本用意します。
- ⑦ 御文箱を下におろします。
- ⑧ 勤行本 (厚い本) をもって、法要時刻を待ちます。
- ⑨ 正信偈 (草四句目下) 念仏和讃 三洵 (ゆり) 六首引でお勤めしますので、助音 (じょいん) しましょう。

**A&Q**  
**Q** どうして合掌礼拝するの?  
**A** インドでは古来、右手を清浄な手、左手を不浄の手としています。

私たちは、優しさや慈しむころなど清らかな気持ちをもっているのと同時に、人をねたんだり腹を立てたりする気持ちを持っていきます。

清浄の手と不浄の手、全く正反対の手を合わせることで、私たちの真実のすがたを表しています。

ます。また、相手に対しての信頼の態度ともいわれ、尊いあなたを敬いますという挨拶でもあるようです。

自分の姿を見つめ、尊い阿弥陀様のはたらきを、お敬いする意思表示といえるでしょう。



#### ■赤羽別院帰敬式のご案内

別院の報徳会では、御連枝をお迎えして、帰敬式を行います。早速、手次寺へお申込み下さい。

- 日時 四月十一日 (水)
- 冥加金 二万円
- 場所 赤羽別院

一人でも多くの方のご参加を願っています。

#### 編集後記

赤羽別院は、桜の名所でも知られています▼桜の花に励まされ、押しだされて、仏弟子への一歩を歩みだしては如何でしょう (小谷)